

小 糸 (二世の契縁綬絲)

へなべて世の人の心はしら糸も 恋にはいとど染みやすき その愛しさの濃むらさき 色に出でたる江戸鹿の子 言うに言われぬ恩と義理 深き情けにからまれて 憂き身を何と佐五郎が 小糸とはなの二人連れ

小糸 へやあれはまさしく二人の行方を捜す追っ手の者か

佐七 へ見咎められては恥のはじ

へ一先ずここをと思案して 暫し二人が草がくれ

へ商い神のめぐみやら 今日も馴染みの箭大臣 酔うた元気で声高く
へそもく紀州名草の郡 加田淡島の権兵衛 飴の神よりお授けて
千年飴の名代もの お子さま方の腹ぐすり さあく買わしやれ 夙や
ろな 夙がいやなら繪をやるな へ金時 渡辺 鬼の腕 巴御前が簪の
へ鼈甲の折れでも 金挺子棒のまがりでも 何でも持てきな取替えべ
にしよ 鉦と太鼓で囃し立て いとど機嫌も宵月に 浮かれ烏がアア
庵崎の 土手をどんつくちゃんがらどんつくウ 歩み来る
へ追っ手ならねば二人は立ち出で行かんとするを

飴屋 へイヨ 稲むらの蔭から花のような二人連れ ヨー紀伊国屋に成駒屋

ハハア聞こえた色だな ヤ色だな

小糸 へあアもしその様な者ではござんせぬぞえ

佐七 へ兄妹連れて蓮華寺の供養へ詣りて戻りがけ

小糸 へどうやらお前は淡島の

飴屋 へンーヤお察しの通り元は修行者 ヤ今はその手じゃ行かぬ故

へ長袖やめて商人とちよつとなりわいも取替えべにしよ そこでお
ららが鑑定は惚れて惚れられて相惚れとやら とどの詰まりが儘な
らぬ いっその事にどんぶりとなげの情けとやらかして へ手に手を
取りの一声は 月が啼いたかほととぎす 冥途へ往って添おうとは
そりや白露の無分別 へなんば極楽でも蓮の葉に 乗らりよかのんし
乗ればぶらくらぶらりしやんらアリヤくくセ 道化交じりに諫め
ける

飴屋へや何と俺が言うことは尤もであらうがな

佐七へご親切なるそのご意見 忝けのうござりまするさはさりながら某はアこれへ小系に囁き立ちかけるを

小系へそりや聞こえぬぞえ佐七つあん

へそれその様な無理なこと 言うは殿御の常ながら こんな難儀になつたのもみんな私が恋路からへお前に武士を捨てさせて今は憂き世を隠れ笠 みの言い訳も荒磯の 汐なれ衣 苦家もる へ月の宿りや深山の奥で 芝も刈り候野の末の へ世帯しがない片手には機の糸繰り織紡ぎ 何の苦にしよういとやせぬ いっそ殺して下さんせ やいのく
と搔き口説く

飴屋へアアこれくさりとは姉えも悪い料簡

へところであしが売り物の 白玉の緒の延ばすは飴の寿命糖

へもんけんうんけんちやちやなんば ぞういうもんだ麴町 我らが近所の山の手へ 二人気ままに駿河台 へ胸の湯島が煮えかえる 加賀腹の立つことあらうと そこはサラリと江戸川の 流れ渡りの新世帯 恋し可愛い仲なれど 九尺二間の裏店も 野暮じやごんせぬ水道町 へ廻るお長屋お向こうが三軒両隣 誰に気兼ねもしつぽりイイト
へ極楽水じゃあるまいか

小系へアレあのように云わんすからは

佐七へ言葉に任せてひとまず此処を

飴屋へサアわしと一緒に

へとそやし立て 妹背を守る淡島の名こそ憂いの玉箒 夜間を告ぐる鐘の音も 延ぶる寿長命寺 頼もしかりける次第なり